

「泣き」に対する看護大学生の反応に関する一考察

—「マイベビー3」を用いた男女の比較—

Consideration of the Nursing Student Reacting for “Crying”

—Comparison of a Male and Female Using “My Baby 3”—

小倉由紀子・谷口美智子・角谷あゆみ・加藤 泉

Yukiko Ogura, Michiko Taniguchi, Ayumi Sumiya and Izumi Kato

要 旨

本研究は、A大学看護学部3年生86名を対象に、1.マイベビー3（育児体験疑似教具）を用いて「泣き」を聞いた時の看護学生の感じ方と対応を自記式質問紙調査すること。2.対処行動を静止画像から行動分析し、それぞれ男女比較することを目的とした。結果1.「泣き」に対して「困惑・戸惑う」気持ちを持ち男子15名(88.2%)、女子44名(64.7%)が感じていた。男女で異なった特徴は、「泣き止ませたい」という感じ方が男子に多く、女子では「自分を責める・無力感」が高かった。2.対応では「抱っこしてあやす」が男子10名(58.8%)・女子44名(64.7%)、「おむつかミルクを与える」が男子8名(47.0%)・女子29名(42.6%)であった。3.静止画像から抽出した行動は、「注視行動」、「抱く行動」、「佇む行動」であった。「注視行動」と「抱く行動」は女子が多く、「佇む行動」は男子が多かった。男子に対しては、「何が必要か」を考える時間的余裕と一度に多くのことを要求せず、一つ一つ解決できる方法を考えることに時間が必要であり、その時間を確保できるようにすることが大切である。一方、女子に対しては、行動を肯定し、十分な関わりや反復練習により自信を持たせることが必要であることが示唆された。

キーワード：育児体験赤ちゃん、泣き、看護学生、反応

I. はじめに

はじめて親となる夫婦の子育て環境は、核家族化と少子化が顕著になった1980年頃より、大きく変容してきている。これは、幼い子どもの世話をする大人を身近で見たり、その手伝いをする中で自然に身につけていた「親になるための学習」ができにくい社会環境への変化である（川瀬，2010）。

また核家族での子育ては、夫婦のみで子に

関わらなければならないため、子どもと触れ合う機会がないまま親になり、子どもにどう接すればよいかわからない者が多くなっている（古賀・岡本，2004）。

このような現状の中、子どもと接する機会が少なかった場合は「泣く子をあやす」経験もなく、わが子が生まれてから初めて「泣き」に対応することになる。しかし、生まれたばかりの子は「泣き」によって自分のニーズを伝えるが、「泣き」に慣れていないと対

応することは難しい(田淵他, 1999)。高い調子で繰り返される生まれたばかりの子の泣き声は、大人の情動反応を引き起こす強力な刺激である(Murray, 1979. 1980. 1985)。この刺激がしばしば強力であるがゆえに、子の生命や身体の安全を脅かすことにつながるのである(陳, 1986)。

昨今、メディアで騒がれている乳幼児虐待や親の「衝動殺人」などは極端な例であるが、殆どの場合「泣き」に対して嫌悪を感じ、抱いてもあやしてもミルクを与えても、おむつを替えても泣き止まず思うようにならない時に、力加減がわからないまま抱き上げて揺さぶるといった、衝動的な行動が虐待の誘発にもつながっているのである。

一方、親であるにも関わらずあてにできない夫や、夫婦なのに自分と関わろうとしない妻に対する夫の不満が生じている。この不満が、家庭内の人間関係を悪化させ、それが子どもへの虐待的傾向に繋がるともいわれている(前田, 2007)。

これらのことから、夫婦が協働し子育てを行うことが今後の重要な課題である。どうすれば男女が協働できるのか、夫婦が協働し子育てを行うためには何が必要とされるのか、経済学・心理学・社会学・家族学等、様々な側面から研究が進められているが、解決策は見出されていない。女性の社会参画を促進し子どもを増やすために、社会全体が積極的改善措置(ポジティブアクション)の具体化に乗り出す必要がある。

こうした社会情勢を踏まえ、子育て家族の姿をバーチャルに体験できる看護学生を調査することに価値があると考えた。なぜならば、母性看護学実習で、通常は体験できない子育て中の夫婦や家族と接し、未来の子育て

をイメージ化できる貴重な機会が与えられているからである。

また母子を受け持つことで、初めて親となる男女のおかれている状況を学習する機会を持ち、同時に、知識や経験の少ない夫婦がどのような体験をしているかについても学習を深めることができるからである。

そのため、「泣き」に対する看護学生の感じ方や対応、対処行動は、はじめて親となる男女の姿と重なり、男女を検討することが、これから夫婦で協働し、子育てをする男女にとって新しい戦略を模索することに繋がると考えている。

II. 研究目的

本研究では、近い将来親になると想定される年齢にある看護学生を対象とし、1. マイベビー3(育児体験疑似教具)を用いて「泣き」を聞いた時の看護学生の感じ方と対応を明らかにすること。2. 対処行動を静止画像から分析し、それぞれ男女比較することを目的とした。

III. 用語の定義

泣き：乳児とその環境との交信行動で、様々な育児行動を引き出す刺激のこと。

直感：説明や証明を経ないで、物事の真相を心で直ちに感ずること。

感覚：光や音や、機械的な刺激などに対応する受容器が受けた時に経験する心的現象のこと。

マイベビー3：マイコン制御の育児体験ベビーで、命の尊さや、親の責任を考えるきっかけを作る疑似体験教具である。本物の赤ちゃんと同じように世話をしてほしい時や、叩いたり危険な抱き方をすると泣き声をだし、適切な対応をすると機嫌のよい声を出す。1サイクルの流れは、ミルクの世話、ゲップの世話、おむつの世話、あやす世話ができる。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

- (1) 自記式質問紙
- (2) 静止画像の枚数による行動分析

2. 研究参加者

- (1) A大学看護学部3年生86名（男子学生17名と女子69名）
- (2) 上記の中から画像調査に同意を得られた3年生10名（男子学生5名と女子学生5名）一人10枚、合計100枚の静止画像を対象とした。

3. 調査期間

平成26年6月～12月に実施した。

4. データ収集方法

- (1) 研究参加者に着席してもらい文書と口頭で説明し同意を得た。実習室の最前列でマイベビー3の泣き声刺激1サイクル（5分）を提示し、①ベビーが泣き止まない時、どのように感じたか、②泣いた時どうすればいいかの対応方法についての質問項目に回答するように求めた。その後、終了した者から退室した。
- (2) 調査は学生個々に個室で実施した。「泣き」の対応場面の体験を捉えるために、

マイベビー3の1サイクル5分の体験時間とした。対応するための準備として傍らに「おむつ交換の準備」、「ミルク哺乳の準備」、「玩具の準備」、「おんぶ紐」を身近な場所に置いた。その際、共同研究者は看護学生に、直接的な働きかけはしないこととし、看護学生から助けを求められたときは、思春期保健相談士が対応できるようにした。また必要時は、別室待機の心理カウンセラーに依頼をした。学生が圧迫感を感じないように3脚に設置した広角レンズを用いたビデオで、部屋の隅から撮影した。

5. 調査手順

- (1) 2014年11月上旬までに学生に参加協力要請の用紙を配付し、文書と口頭にて対象者を募り、参加説明を実施した。
- (2) 許可が得られたところで同意書に記入してもらい、都合の良い日時を設定してもらった。学生からの設定希望日時はオリエンテーション終了後であった。実施前には、再度同意の確認を行った。

6. 分析方法

- (1) 得られたレポートデータは調査内容に従い、「感じ方」とその時の「対応」で分析をした。自由記載されたセンテンスを記録単位としたが、学生のレポートには長い文章や短いものがあり、長いものは意味の分かる文脈で区切った。男女のデータ数に差があるため、男女別で個々の記録単位を意味内容の類似性に基つき分類し、共通項目と独自項目にわけた。
- (2) 1人5分の動画映像を、30秒ごとの静止画10枚にして対応場面を比較した。分析は1人10枚の画像を横に10名分を並べた

(図1). 学生の行動を、3名の教員で付箋に行動名をつけ写真上に貼りつけ、比較検討を行った(図2). 動画から静止画への作成方法は、5分ごとの動画をパソコンPrintScreenキーで30秒毎に切断し、スタートボタンからペイントし、貼り付けた。その後JPEG画に保存し、エクセルに挿入し、30秒ごとに張り付けた。

7. 倫理的配慮

看護学生に参加協力の用紙を配付し文書と口頭にて対象者を募った。その後、参加説明を実施し、協力が得られた人を対象とした。これらの対象者に対して事前に研究目的と内容、プライバシーの保護について説明し、同意書にて同意を得た。

対象者の個人情報の取り扱いについては、倫理的手続きを踏むことを説明した。研究で得た情報は本研究の目的以外に使用しないこと個人が特定されることがないように配慮した。また、情報は研究者以外は扱うことがないように管理方法を徹底した。

看護学生には、参加は自由意志であり、途中で参加協力を中断できることや研究を拒否することによって成績など不利益を被らないことを強調し説明した。

研究内容については、2014年中京学院大学の倫理審査委員会にて承認を受けた。

V. 結果

(1) マイベビー3の「泣き」を聞いた看護学生の感じ方と対応

ベビーが泣き止まない時に感じたことは、共通項目は、「困惑・戸惑う」、「不安になる」、「泣き止ませたい」、「焦る」、「イライラする」、「いろいろな方法を考える」であった。

男子は「困惑・戸惑う」15名(88.2%)、「不安になる」7名(41.2%)、「泣き止ませたい」6名(35.3%)であった。女子も「困惑・戸惑う」が44名(64.7%)と最も多く、次に「自分を責める・無力感」19名(27.9%)、「イライラする」と「不安になる」がそれぞれ17名(25.0%)であった。

男女で異なる特徴は、男子が「泣き止ませたい」という感じ方が多かったのに対し、女子では「自分を責める・無力感」があがった(表1)。

泣いた時の対応は、「抱っこしてあやす」が男子10名(58.8%)・女子44名(64.7%)、「おむつかミルクを与える」が男子8名(47.0%)・女子29名(42.6%)、「おもちゃを与える」が男子6名(35.3%)・女子28名(41.1%)であった。男子では「自分も赤ちゃん以上に泣く」、「アプリを利用する」があり、女子では「音楽を聞かせる」、「歌う、声掛け」などがあがっていた(表2)。

表1 ベビーが泣き止まない時の感じ方(複数回答)

	男子看護大学生 n=17 (%)	女子看護大学生 n=68 (%)
共通項目	困惑・戸惑う	15(88.2)
	不安になる	7(41.2)
	泣き止ませたい	6(35.3)
	焦る	5(29.4)
	イライラする	1(5.8)
	いろいろな方法を考える	4(23.5)
独自項目	ストレスを感じる	3(17.6)
	ほかっておく	1(5.8)
	自分が泣きたい	1(5.8)
	泣けば解決すると思っている	1(5.8)
	自分を責める・無力感	19(27.9)
	何かしてあげたい	12(17.6)
	心配になる	9(13.2)
	いろいろな方法を考える	8(11.7)
	誰か助けて	5(7.3)

表2 泣いたときの対応 (複数回答)

	男子看護大学生 n=17 (%)	女子看護大学生 n=68 (%)		
共通項目	抱っこしてあやす	10 (58.8)	抱っこしてあやす	44 (64.7)
	おむつかミルクを与える	8 (47.0)	おむつかミルクを与える	29 (42.6)
	おもちゃを与える	6 (35.3)	おもちゃを与える	28 (41.1)
	ゲップをさせる	4 (23.5)	ゲップをさせる	6 (8.8)
	おしゃぶりをあげる	3 (17.6)	おしゃぶりをあげる	6 (8.8)
独自項目	サングラスをかけさせる	2 (11.7)	音楽を聞かせる	20 (29.4)
	自分も赤ちゃん以上になく	1 (5.8)	声をかける	10 (14.7)
	観察する	1 (5.8)	いないいないパーをする	9 (13.2)
	児の声に返事する	1 (5.8)	歌を歌う	8 (11.7)
	アプリを利用する	1 (5.8)	ポリ袋をくしゃくしゃする	6 (8.8)
			散歩に行く	5 (7.3)
			バスタオルでくるむ	5 (7.3)
		砂嵐を聞かせる	3 (4.4)	
		目に息を吹きかける	1 (1.4)	

(2) マイベビー3の「泣き」に対応する看護学生の「対処行動」

画像調査に同意を得られた男子学生5名と女子学生5名の計10名を対象とした。その中で、これまでに赤ちゃんの世話をした経験があるものは、男子1名(20%)、女子3名(60%)であった。一人一枚、合計100枚の静止画像より行動を抽出した(図1・2)。



図1 1人10枚の静止画像(合計100枚)



図2 分析中の様子

抽出した行動は、「泣き」の刺激から表出すると考えられる「注視行動」、「抱く行動」、「佇む行動」であった。多い順に注視行動は

90/100枚、児を抱いている行動は57/100枚、何もせず佇んでいる行動が20/100枚であった。児を注視している「注視行動」の平均枚数は男子8.6枚、女子9.4枚で女子が多かった。注視の少ない学生は10枚中5枚で男子1名にあった。また、児を抱いている「抱く行動」の平均枚数は、男子5.2枚、女子6.2枚で女子が多く、じっとしている「佇む行動」の平均枚数は男子2.2枚、女子が1.8枚で男子が僅かに多かった。

VI. 考察

(1) マイベビー3の「泣き」を聞いた看護学生の感じ方と対応について

今回の対象は看護学生で、男女とも2年生後期に母性・小児の看護学概論と3年生前期に母性・小児の看護学援助論で新生児の看護について学習が終了している。学内の演習では、沐浴人形を使用し演習を行っており、「泣き」への対応がないまま、病院の臨地実習で初めて「泣いている新生児」を経験することとなる。実習前半の学生達は、困惑し戸惑いの感じ方を見せ、「実際の新生児は泣くから大変」や「泣くと困る」などの声が聞かれていた。「泣き」への対応は経験を積むことで解決できるものがあると神谷(2007)らが指

摘する通り、泣きがどういうものか理解されれば「泣き」に対する対処ができ、「泣き」からくるストレスも減らすことができると考える。

そのため、学生達も何度か経験を積み、実習後半には、何故泣いているのかが理解できるようになり、実習中に「泣き」に対応できていく。実習前の学生では、児との接触経験の有無により大きな違いが生じていることも考えられる。しかし「泣き」の経験のなかった4名中1名の男子学生は、「自分が泣きたい」と感じ、対応は「自分も赤ちゃん以上に泣く」と答えていた。このことは、経験回数でなく、「泣き」の現象のみを捉え、「泣き」の理由が理解できない状況にあると考えられ、泣きが理解されれば対応はできると考えられた。

佐々木ら(2010)の研究では、男性は女性のように接触体験の効果がみられるわけではなく、状況によっては「泣き声」に対するストレスや緊張を強く抱きやすいことがあるとも言われ、男女で接触経験による効果に違いがあると指摘している。

またOstwald(1968)は、「泣きに対して父親の欲求不満や緊張が最も強くなるのは、わが子を助けたいという気持ちが実行に移せなかったり、なだめようとする努力が失敗に終わったときに、赤ちゃんに怒りを覚えイライラが募る」といわれている。

このことから、男子学生には、女子学生と同じような接触経験を増やして効果を求めるのではなく、一度の体験でも肯定的な体験になるように配慮することや大勢の前で実施させ恥をかかせないように配慮することが必要である。

また、女子学生は泣き止まないことで自分を責め、無力を感じやすい。そのため早い時

期からの接触体験で、自信を持たせることや、その体験を生かした学習の工夫などの必要性も考えられた。

これらのことから、男子学生には集団教育ではなく個別的な対応方法を検討し、肯定的な体験を積み重ねていけるように、指導方法を工夫することが重要である。また女子学生には、これまで通り集団教育を早い時期から設定し、経験を積んでいくことが必要である。

さらにマイベビー3などを用いた育児生活を想定できる関わり方の提供も、次世代を担う人々の看護には必要であると考えられた。

(2) マイベビー3の「泣き」への対処行動について

学生1人あたり5分間の撮影を全100枚の静止画像としたが、90%の学生は児を注視する行動が見られ、児に対する関心や感情を持っていると考えられた。

ものを見るとき、いつ、どこに、どうやって注目するかといった注視行動は、観察者の潜在意識や経験によって異なるといわれている(岩月・榎掘・平山他, 2013)。児に対する注視が少ない1名の男子学生は、カメラを意識したり、自分の実施を教員に確認する行動をしていた。これは失敗したくないという意識が強いと考えられ、自分に意識を集中させた結果、児に関心が少なくなってしまったと推測された。

また相手や状況によって対処する行動をとるためには、これまでの児への接触経験や価値観が大きく影響すると考えられる。そのため、演習などでは、「泣き」の対応がうまくできるように成功体験を積み重ねていくことが対処行動の自信につながる。

さらに女子学生の中には、無意識に抱っこ

しようと手を伸ばす様子がみられた。これは未熟なものに対する母性本能であると考えられる。しかし、男子学生には、上記のような行動は少なく、「泣き」のパターンを探るような佇む行動がみられ、頭で思考する時間や次の行動を考え、行動に移すまでに時間が必要であることが示唆された。

このことは、対象者の数に限界はあるが、「男女の思考パターンの違い」と一部同様な結果ではないかと考えられる(三田・伊藤・指宿, 2007)。三田らによると女性は一度に多くのことができるが、直感や感覚で物事を判断しやすい。逆に男性は集中しやすいが、同時に多くのことを行うのは苦手であるとしている。これは、脳梁の太さにも影響しているといわれている。

男子学生は「泣き」に対して佇む様子から、「何が必要か」を考える時間的余裕と一度に多くのことを要求せず、一つ一つ解決できる方法を考えることに時間が必要であり、その時間を確保できるようにすることが大切である。一方、女子学生は、「泣き」の現象に対して直感や感覚で物事を判断しやすく、「抱いてほしいから泣く」と考え、無意識に手をだす行動傾向がある。そのため女子学生は、その行動がうまくいかないと後悔することもあり、後になって無力感や自責の念を感じている場合がある。この場合、行動を肯定し、十分な関わりや反復練習により自信を持たせることが必要であることが示唆された。

この結果に今後も着目し、次世代を担う親になる人々の看護に反映していきたい。内容には性差による感じ方や対処方法の違いなどの検討を含め、母性看護学の授業や演習を構築していきたいと考えている。

VII. 結論

1. 「泣き」に対して「困惑・戸惑う」気持ちを男子15名88.2%、女子44名64.7%が感じていた。男女の共通項目は、「困惑・戸惑う」、「不安になる」、「泣き止ませたい」、「焦る」、「イライラする」、「いろいろな方法を考える」であった。男女で異なった特徴は、「泣き止ませたい」という感じ方が男子に多く、女子では「自分を責める・無力感」を感じていた。
2. 対応では「抱っこしてあやす」が男子10名(58.8%)・女子44名(64.7%)、「おむつかミルクを与える」が男子8名(47.0%)・女子29名(42.6%)であった。その他の共通項目は、「おもちゃを与える」、「ゲップをさせる」、「おしゃぶりをあげる」があった。
3. 静止画像から抽出した行動は、「泣き」の刺激から想定される「注視行動」、「抱く行動」、「佇む行動」であった。児を注視している「注視行動」、児を抱いている「抱く行動」は女子が多く、じっとしている「佇む行動」は男子が多かった。

VIII. 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象は、A大学の学生のみを対象とし男女の学生数に偏りが見られたため、全体の結果にも影響があったと考える。

また、初めていく実習に向け、学生が緊張に苛まれたり、緊迫した空気の中で実施したことは学生が望んだこととはいえ課題も大きく、今後は適切な時期に実施できるように配慮したい。さらに行動分析のデータ化の方法については空白部分についても検討できるよ

うにエビデンスレベルを高め、母性看護学実習における看護学生の検証を今後も重ねていきたい。

謝辞

本研究の主旨をご理解していただき、ご協力くださいました研究協力者の皆様に深く感謝いたします。

なお、本研究は、2014年度の共同研究費の助成を受け、2015年3月に日本助産学会学術集会、2015年6月に第16回日本母性看護学会学術集会で発表したものに加筆・修正を加えたものである。

【文献】

陳省仁(1986). 新生児・乳児の「泣き」について：初期の母子相互交渉及び情動発達における泣きの意味. *ThAnnualReports On Educational Science*. 48, 187-206.

岩月厚, 榎掘優, 平山高嗣, 間瀬健二 (2013). 指導者の注視行動の分析. *第75回情報処理学会誌*, 471 - 472.

Jordan. P. L(2002). Laboring/fox/relevance : Expectant and new fatherhood, *Nursing Research*. 39(1), 11-16.

川瀬隆千 (2010). 大学生の親準備性に関する研究. *宮崎公立大学人文学部紀要*, 17(1), 29-40.

前田由美子 (2007). 子育て支援は父親支援. *共愛学園前橋国際大学論集*, 7, 119 - 137

三田雅敏, 伊藤知佳, 指宿明星 (2007). 男女の思考パターンに違いはあるのか? : 男脳・女脳の分析. *東京学芸大学紀要*, 59, 37-41

Murray. A. D (1979). Infant cry as an elicitor of parental behavioral, an examination of two models. *Psychological Bulletin*, 86

(1), 191-215.

Murray. A. D(1980). Infant cries and their compelling nature. *Cry Research Newsletter*. 3, 2-5.

Murray. A. D(1985). Aversiveness is in the mind of the beholder. perception of infant crying by adults, In B, M. Lester&C. F. Z. Boukydis (Eds) (1985). *Infant crying : theoretical and research perspectives*. New York Plenum, 1985.

中島久美子, 高橋恵, 園清京子 (2005). 生後6カ月児をもつ母親が認めた夫の父親行動. *群馬保健学紀要*, 26, 19-26.

中島久美子, 常盤陽子(2008). 妊娠期の妻への夫の関わりと夫婦関係に関する研究の現状と課題. *群馬保健学紀要*, 29, 111-119.

中島久美子, 伊藤玲子, 園清京子 (2011). 共働き夫婦が認識する妊娠期の妻が満足と感じる夫の関わり. *北関東医学学会*, 61, 327-344.

岡本祐子, 古賀真紀子 (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析. *広島大学心理学研究*, 4, 159-172.

P. Ostwald, *Soundmaking*(1968). *The Acoustic Communication of Emotion*(Springfield, IL : Charles C. Thomas)

新川治子(2006). 切迫早産の初産婦の夫の妊娠や出産, 父親になることに対する気持ちの変化. *日本助産学会誌*, 20(2), 64-73.

田淵紀子 (1999). 新生児の泣き声に対する母親の反応. *日本助産学会誌*, 12(2) 32-44.

田淵紀子, 島田啓子 (2006). 生後1カ月から1年までの乳児の泣きに対する母親の情動反応に関する縦断的研究. *日本助産学会誌*, 20(1), 26-36.